

末摘花の思想

—源氏物語における兼濟への志—

村 井 利 彦

一

末摘花の風貌は醜怪である。いま、本文通りに描写すると、まず胴長。すぐ目にとまるのは鼻で、全く「普賢菩薩の乗物」（白象）と同じ。異様に高くて長い。先端が少々垂れ気味で、赤らんでいて気持悪い。顔色はというと雪も恥じるほど「真青」で、額のあたりは相当に出張っていて、全体が下方に伸びているのだから、信じられぬ程の馬ずらである。体は痩せさらばえていて、肩のあたり衣をきても痛々しく見える。頭の格好や黒髪はそれでも、誰と較べても負けぬ程で、一尺ぐらい余してひきずつている。装束はというと、薄紅のひどく色あせた襲に汚れ切った桂を重ね、上着には香をたきしめた綺麗な「黒貂くろぎの皮衣かわぎぬ」をまとっている。黒貂の皮衣は、古代の由緒正しい装束ではあるが、若い娘に似合うはずがなく、奇怪な印象である。しかし、この皮衣がなければ、さぞ寒かろうと思われる顔

だから……と光源氏は同情している。

散々な描写である。唯一の美点、黒髪とても、なまじ美しい分だけ前面の醜惡さを際立たせる相乗効果しか期待できない。何故、未摘花は醜惡であらねばならないのか。モデルでもあって、それと二重映しの笑いなら、これはさらに陰惨な図柄になる。

モデルを言うなら、私は、重明親王の長男・源邦正をあげたい。女でないのは残念だが、作者が事実をありのまま書く訳でもないこと、蜚蜚の物語論を引くまでもなかるう。邦正の話は、『宇治拾遺物語』や『今昔物語』にある。ともあれ、引用してみよう。

今ハ昔、村上ノ天皇ノ御代ニ、旧キ宮ノ御子ニテ、左京ノ大夫□ト云フ人有リケリ。長少シ細高ニテ、極ク□ヤカナル様ハシタレドモ、有様・姿ナム鳴呼也ケル。頭ノ鏡頭也ケレバ、頸ハ背ニ不付ズシテ、離レテナム被振ケル。色ハ露草ノ花ヲ塗タル様ニ青白ニテ、眼皮ハ黒クテ、鼻鮮ニ高クテ、色少シ赤カリケリ。腎ハ薄ク色モ无クテ、咲バ齒ガチナル者ノ斷ハ赤クナム見エケル。音ハ鼻音ニテ高カリケリ。物云ヘバ一内響キテゾ聞エケル。歩ビハ、背ヲ振り尻ヲ振りテゾ歩ビケル。其ノ人、殿上人ニテ有ケルニ、責テ色ノ青カリケレバ、□ノ殿上人皆此レヲ、青経ノ君トゾ付ケルテ咲ヒケル。（『今昔物語』巻28ノ21）

今は昔、村上の御時、古き宮の御子にて、左京大夫なる人おはしけり。ひととなり、すこし細高にて、いみじうあてやかなる姿はしたれども、やうだいなどもおこなりけり。かたくなはしき様ぞしたりける。頭の、あぶみ頭なりければ、纓は背中にもつかず、はなれてぞふられける。色は花をぬりたるやうに、青じろにて、まかぶら窪く、はなのあざやかに高くあかし。くちびる、うすくて、いろもなく、笑めば齒がちなるものの、齒肉あかく

て、ひげもあかくて、長かりけり。声は、はな声にて高くて、物いへば、^{ひと}「うちひびきて聞えける。あゆめば、身をふり、肩をふりてぞ歩きける。色のせめて青かりければ、^{あをつつね}「青常の君」とぞ、殿上の君達はつけて笑ひける（『宇治拾遺物語』一二四）⁽¹⁾

サイズチ頭に限どられた深目、出歯とハイソプラノにモンローウオークは流石の末摘花もないが、瘦身、青白い顔色、高くて赤い鼻、そして「古き宮の御子」と、かなりイメージは接近している。本文はこれに続けて、帝の制止にもかかわらず、殿上の君達が青常をコケにして笑う話が続き、兼通の青ずくめは圧巻で、帝も遂にあきらめることになる。光源氏と大輔の命婦が、歳の暮に送ってよこした晴着を前に洪笑する場面には、その反映があろうし、末摘花の「掻練好」み、光源氏が紫上の前で「鼻に紅をつけて」おどける巻末の場は、兼通の青ずくめに比せられよう。

邦正の父、重明親王は、『吏部王記』の著者として名高い。この記録が『源氏物語』に濃密な影を落していること古注をひもとけば一目瞭然だが、今はそれには触れまい。すでに『花鳥余情』の指摘したところだが、この重明親王には、注目すべき話が伝わっている。『江家次第』五、「春日祭途中次第」の末尾に、

昔蕃客参入時、重明親王乗鴨毛車、着黒貂裘八重見物、此間蕃客纔以件裘一領持来為重物、見八重大慙云々⁽²⁾とある。原産地から来た「蕃客」ですら、ようやく「一領」しか「持来」できぬ「重物」の「黒貂裘」を、重明は八枚も重ねて着ていたというのである。「蕃客」の「大慙」は当然として、同僚の垂涎もおよそ察しがつこう。貂裘は仁和元年の禁令以後、参議以上の者でなければ着るに着れぬ「上代の重物」⁽³⁾であったのである。

この重明親王が、末摘花の父・常陸宮のモデルであったとすれば、末摘花は、父の形見、八領のうちの一領を身につけて雪の朝、光源氏の側に坐っていたことになる。作者は、分る人には分るこの効果を、「黒貂の皮衣」の一句に

しのばせたのではあるまいか。もちろん、重明親王は常陸宮ではなく、上野宮である。事実は生では語られていない。末摘花に影のように付きそっている乳母子・侍従は「斎院に参り通ふ若人」として設定されている。これとて、斎院と斎宮の差はあるけれども重明親王の系図を見れば、いかにもありそうな話である。末摘花を歌の下手な女としたのも、徽子女王＝末摘花説への牽制ととれる。言うまでもないが徽子は当時一流の歌人である。

醍醐天皇

重明親王
母昇女
 本名將保 二品式部卿

〔頭〕略記。天曆八年九月十四日。三品式部卿重明親王薨。年四十九

徽子女王 歌人。配三村上。号二承香殿又斎宮女御。母貞信公安

旅子女王 斎宮

源邦正 従四下。侍従。左京大夫。号二青侍従一世云二青常。母同二徽子一

行正

信正

しかし、この詮索も所詮座興にすぎぬ、と私は思う。末摘花は青常などを語る目的で造型されたとは到底思われない。青常は、作者の巧妙なくくし味の一つにすぎないと私は思うのである。

二

私はこれまで末摘花を次のようにとらえていた。夕顔を忘れられぬ光源氏に夕顔を忘れさせる物語。つまり、夕顔の夢をも来ぬという現実の厚い壁を末摘花の醜悪さが象徴し、光源氏はもちろん、読者にも納得させて、夕顔で閉じられた中品物語を完璧に密閉する。後は、紫上の成長から結婚への道を『源氏物語』はひた走る。⁽⁷⁾

今も、この基本的把握に変化はないのだけれども、近時、この巻を氣をつけて読んでみて、もし別の角度からとらえなおせるのではないかと思うようになった。前置きが長くなりすぎた。以下私見を述べてみたい。

最初に触れたように、光源氏は末摘花の風貌に驚嘆する。そして、辞去する時、彼が常陸宮邸の中門のあたりで時間をとる場面が添加されている。何でもない寒く貧しい場面で、印象的ではあるが、必然性に乏しい箇所のような気がする。玉上氏ならずとも「何故にかような貧しい門番をことさらに点綴しなければならなかったのか。理解に苦しむ」⁽⁸⁾のは当然であろう。

が、しかし、この場面こそ、末摘花巻の精髓ではないか、と私は思うようになった。全文を引用する。

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて、夜目にこそしるきながらもよろづ隠るへたること多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖かげに降り積める、山里のこちしものあはれなるを、かの人々の言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし、げに、心苦しうたげならむ人をここにすゑて、うしろめたう恋しと思はばや、あるまじきもの思ひは、それにまぎれなむかしと、思ふやうなる住処に合はぬ御ありさまは、取るべきかなしと思ひながら、我ならぬ人は、まして見忍びてむや、わがかうて見馴れるは、故親王のうしろめたしとたぐへ置きたまひけむ魂のしるべなめりとぞおぼさるる。橘の木のうちもれたる、御隨身召して払はせ給ふ。うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるる雪も、名にたつ末のと見ゆるなどを、いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もなと見たまふ。

御車出づべき門は、まだあけざりければ、鍵のあづかり尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で来たる。女にや孫にや、はしたなる大きな女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へるけしき深うて、あやしきもの

に、火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり。翁、門をえあけやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくななり。御供の人、寄りてぞあけつる。

ふりにける頭の雪を見る人も劣らずぬらす朝の袖かな

わかきものはかたちかくれず、とうち誦したまひて、鼻の色に出でて、いと寒しと見えつる御おもかげ、ふと思ひ出でられて、ほほゑまれたまふ。⁹⁰

前半は光源氏の心象風景。夕顔を発見できなかった失望感がにじんでいる。「かの人々の言ひし葎の門」は、この巻が雨夜品定め、範疇のものとの作者の認識を示している。『あるまじきもの思ひ』は、藤壺との一件で、帚木三帖で小出しにし、若紫巻で具体化していた事件である。こういうもの言いも又、この巻が、若紫には並び、帚木三帖には接続するという心理的秩序を語っているともいえる。

問題は後半にある。

「わかきものはかたちかくれず」は、古注がすでに指摘するように、『白氏文集』の「秦中吟」十編中の一編「重賦」の中の一句である。この場面は、この一句にとどまらず、「重賦」の一部を、かなり露骨に下敷として構成されている。その部分（第21句～28句）を引用すると、

歳暮天地閉 陰風生破村

夜深煙火尽 霰雪白紛紛

幼者形不蔽 老者体無溫

悲喘与寒氣 併入鼻中辛⁹¹

「幼者」と「老者」、「雪」と「歳暮」。さらに『細流抄』が指摘したように、末摘花の生活そのものが「陰風生破村 夜深煙火尽」であることを考慮すれば、正しくこの部分は末摘花巻の構想そのものに影を落しているといえよう。『源氏物語新釈』が説いたように、「悲喘与寒氣 併入鼻中辛」が「寒ければ、鼻の先、赤く色づくものなれば、色に出でていと寒しといへる也」に反映し、末摘花の鼻の色をクローズアップするとすれば、彼女の鼻の色こそ、彼女の世界における「悲喘」の象徴であると読めなくなろう。又、そう読むべきではないのか。

しかし、「重賦」の影響は、この一部分にとどまり、「重賦」そのものの、全体的影響はない。「重賦」は、その表題から察せられるように、酷税に苦しむ人民の窮状を訴えるというのがその内容であり、山上憶良ならともかく『源氏物語』そのものに、そういう内部告発を望む方が無理というものであろう。

と、ここまで書いて来て、が、しかしと思わざるを得ない。先に言ったように、「重賦」は「秦中吟」十編中の一編である。「秦中吟」十編は「新樂府」五十編とともに、白居易三十代後半に成立した諷諭詩であり、貫ぬく思想は「兼濟」である。光源氏を「兼濟」の人と読めないか。作者は『日記』の中で、中宮に対しひそかに「新樂府」を講じていたと告白している。⁽¹²⁾『源氏物語』そのものに。この諷諭詩の思想そのものが根づいているのではないか。少し、諷諭詩に接近してみよう。

三

「与元九書」で、白居易は、自らの作品を、諷諭詩・閑適詩・感傷詩・雜律詩に四分している。閑適詩は「公より

退きて独処し、或は病を移して閑居し、知足保和、情性を吟詠する」もの。感傷詩は「事物外に牽き、情理内に動き感遇に随つて歎詠に形はるる」もの。この感傷詩には、有名な「長恨歌」や「琵琶行」がある。雑律は「五言・七言の長句・絶句一百韻より両韻に至る者四百余首あり、これを雑律詩と謂ふ」とあつて、内容は判然としない。上記三詩に入らぬものをこう処置したものと推察される。

順序が逆になったが、諷諭詩については、「拾遺よりこのかた、凡そ適する所、感ずる所、美刺興比に関する者、又武徳より元和に迄るまで、事に因つて題を立て、題して新楽府となす者、共に一百五十首、これを諷諭詩と謂ふ」と説明する。彼が、諷諭詩の中の諷諭詩と考えたらしい「新楽府」には序があり、諷諭詩の形式内容は、これによつてさらに明確になる。

序曰、凡九千二百五十二言、断為五十篇。篇無定句、句無定字。繫於意、不繫於文。首句標其目、卒章顯其志。詩三百之義也。其辭質而徑、欲見之者易諭也。其言直而切、欲聞之者深誠也。其事覈而実、使采之者伝信也。其体順而律、可以播於樂章歌曲也。総而言之、為君為臣為民為物為事而作、不為文而作也。

字数は九千二百五十二。詩は五十篇。一篇一句に句数字数の制限はない。「文」より「意」を重視する。はじめにテーマをかがげ、終章に主張を述べる。この形式は詩経三百編の流儀だ。言葉を飾らないのは詠者が分りやすいため、卒直なのは深い戒めとなつてほしいため、真実なのは伝えるためである。詩がすなりとしていて音楽的なのは、唄われる日のため。結論を言えば、この新楽府は、君のため臣のため民のため物のため事のために作ったのであつて、文学のための文学ではない。

「文」より「意」。「花」より「実」が諷諭詩の世界である。「新楽府」五十編の最後の詩、「采詩官」を読め

ば、白居易が「新樂府」で目指した世界が、さらに明らかになる。一部引くと、

采詩聽歌導人言　詩を採り歌を聴きて人言を導びく、

言者無罪聞者戒　言う者罪無く聞く者戒む。

下流上通上下泰　下は流れ上は通じて上下泰し

が、彼の理想とする臣君關係であつたにちがいない。しかし、周が亡び秦・隋の時代となると采詩官はおかれず、臣は阿諛追従に憂身をやつし、樂府は艶詞に墮し内容が全くない。貪吏と奸臣で機能を失つた宮廷を縷々述べた後、彼は「志」を述べる。

君兮君兮願聽此　君よ君よ、願わくば此を聴け

欲開壅蔽達人情　壅蔽を開きて人情に達せんと欲すれば

先向歌詩求諷刺　先ず歌詩に向かつて諷刺を求めよ

「壅蔽」は天子の耳目をおおいかくすもの、「人情」は下々の人民の心。「此」は、「新樂府」五十編そのものを指すとみてよく、「歌詩」も同じ。諷諭詩とは、「君」に「人情」を「達」せしむるための「諷刺」の利いた「歌詩」なのである。彼が自分の樂府に「新」を付けた理由もこれで明らかであろう。樂府は艶詞ではない。

さて、この新樂府で「人情」に達する「君」に、彼は何を期待したか。もはや言わずもがなの事であろうが、諷諭詩の中から「新製布裘」を引いて確認しておく。「新樂府」にも「秦中吟」にも入っていないこの詩を引き合いに出したのは、先に引用した末摘花の雪の朝の段に、少なからぬ影響を与えている諷諭詩であると考えからである。

桂布白似雪　呉綿軟於雲

布重綿且厚　為裘有余温

朝擁坐至暮　夜覆眠達晨

誰知嚴冬月　支体暖如春

中夕忽有念　撫裘起逡巡

丈夫貴兼濟　豈独善一身

安得万里裘　蓋裏周四垠

穩暖皆如我　天下無寒人

自分の着ている「白」く「厚」い「綿」の入った「暖」かい「裘」でもって、「天下」を「蓋」いつくし、「嚴冬」の「月」の下で「寒」さにふるえている「人」を「兼濟」すべきだ。我「一身」のみ「善」くてすまされるか。といった内容である。「独善」を排し、「兼濟」を「貴」ぶ。白居易の主張が鮮やかに記された詩である。彼は、「兼濟」を君主に期待し、自己にも課した。¹³⁾

さて、この詩の、「白」「雪」「綿」「温」「嚴冬」「寒人」の観念連合が、雪の朝の段に、相当に影を落していると思わぬか。「松の雪のみ暖かげに降り積める」世界の中の「鍵のあづかり」の翁と女とがもし出す「寒人」のイメージ。その背景に確実に存在する「裘」を着た、誰よりも「寒しと見えつる」末摘花の「御おもかげ」。光源氏は、これを「ほほゑ」んだとあるが、この微笑、今の微笑とは余程違って、他の用例に照らしてみても、マイナスイメージの笑いである。苦笑、失笑、冷笑といったところか。

しかし、光源氏は思い直す。白居易が「中夕」にガバとはね起き、「裘」を「撫」でながら思いめぐらしたように

雪の朝の段につづけて、紫式部は次のような一文を書いた。

世の常なるほどの、異なることなさらば、思ひ捨てても止みぬべきを、さだかに見たまひてのちには、なかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに、常におとづれたまふ。黒貂くろぎの皮ならぬ絹、綾、綿など、老人どもの着るべきもののたぐひ、かの翁のためまで、上下おぼしやりてたてまつりたまふ。かやうのまめやかごともはづかしげならぬを、心やすく、さるかたの後見にてはぐくまむと思ほしとりて、さまことに、さならぬうちとけわざもしたまひけり。

「上下かみしもおぼしやりて」とあるところから明察されるように、光源氏は「黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など」でもって末摘花の世界全体を「蓋」ったのである。光源氏の「天下」「兼濟」である。

作者は、この光源氏の行為を「さまことに、さならぬうちとけわざ」だと評している。これは作者より読者への注意の喚起であろう。彼の行為は、従前の物語の主人公およびその方法では律しられない行為であることを、さりげなく作者が語っている条であろう。この赤鼻の女に対する光源氏の行為を、九十九髪くじゅうくはみの女に対する業平や、本院侍従に対する平中のそれと、同列に論じて欲しくない、という読者への作者からの要請である。

白居易は、この「新製布裘」を、母の死に逢い、一旦退職し、渭南の故郷へ帰って喪に服している時期に作った。かの地で目撃した民衆の生活が、この詩には反映されていると考えられる。⁽¹⁴⁾「さだかに見たまひてのちは、なかなかあはれにいみじくて」に、そのあたりの事情が語られているとしたら、恐るべきことであるが、これは単にそう見えるだけのことなのかもしれぬ。

とまれ、末摘花の物語は、青常のごとき嗚呼物語ではない。軽んずべからざる、案外な思想性を内部に持たしめら

れた物語ではあるまいか。

四

『源氏物語』に対する「長恨歌」の影響については言われて久しい。が、この作品は、白居易が、馬鬼駅の近在に赴任した三十代中頃の作品で、彼自身、「感傷詩」の中に組みこみ、左程評価している作品とは思われない。彼は「与元九書」において、雜律詩や「長恨歌」ばかりが世に迎えられ、肝心の諷諭詩や閑適詩が、重んじられていないことを歎いている。¹⁵⁾

楊貴妃は「三千寵愛在一身」であつたのだけでも、後宮の、彼女以外の二千九百九十九人は、等しく楊貴妃を恨んで泣いていたという事実を、白居易は諷諭詩の中で力説している。「新樂府」には、楊貴妃に睨まれ妬かれ幽閉されて空しく朽ちていった「上陽白髮人」があるし、「陵園妾」も同工異曲であろう。さらに、天子が神仙を求めることを戒めた「海漫漫」を読めば、これが「長恨歌」への痛烈な批判の詩であること自明であろう。紫式部は、諷諭詩中の諷諭詩「新樂府」を単に読んだだけでなく、中宮に講じたのであるから、以上の事実は先刻承知であると考えられる。充分に承知した上で、感傷詩「長恨歌」を引いた、というより、これは利用したと言うべきであろう。

実際、桐壺巻を冷静に読んでみれば、楊貴妃が桐壺更衣のモデルだと考える人は余程暢気な人である。確かに彼女は、楊貴妃も及ばぬ程の美貌で、帝の愛を一身に集めたが、政治権力など一つも身につけてはいない。親兄弟をとりたてようにも、父はすでになく、いるものは老いた母一人でしかない。彼女自身はというと、いかにも頼りなくう

じうじとして、あげくの果ては他の女御更衣達の恨みが積り積って死んでしまう。彼女の死に快哉を叫ぶ一人の女・弘徽殿女御が造型されているが、彼女こそ、「上陽白髮人」の中に見える楊貴妃の実像なのではないか。作者は、更衣に楊貴妃のイメージを期待していない。

では、「長恨歌」のどこを利用したか。私は、白居易の嫌った「感傷」そのものを利用したのだと思う。

白居易が冷笑した神仙を使うまでして楊貴妃を求めた漢皇（玄宗皇帝）の熱愛。「在天願作比翼鳥 在地願為連理枝」といった、玄宗の見はてぬ夢は、更衣を失った桐壺帝の思いに同じである。本文にも、この二句は露骨に引用されている。長恨歌を響かせながら、桐壺帝の悲歎を語り、見果てぬ夢・愛の永世という「感傷」を徹底して語るのが、桐壺の前・中半のテーマであろう。特に靱負の命婦が里邸を訪れる場面は、玄宗の意をうけた道士が、海上、仙山の嵯閣中にいる楊貴妃を訪ねる場面に照応し、「長恨歌」がここで終るのに反し、『源氏物語』の方は、ここから始まる。里邸には三歳の光源氏が、彼は、この「感傷」の申し子として、父の見果てぬ夢を『源氏物語』そのものの中で追う人生が宿命づけられる。つまり、『源氏物語』は、「長恨歌」のつづきではないか。⁶⁰

その見果てぬ夢は、光源氏と紫上の純愛によって実現する。しかし、その紫上に先立たれた時、光源氏は振り出しに戻る。「幻巻」は紫上のいない痛恨の一年を叙したものが、「夕殿に螢飛んで」とつぶやく彼は全く玄宗皇帝、父桐壺帝に違いない。

『源氏物語』には、白居易の嫌った感傷詩の「歎詠」が、その中枢を貫ぬいている。といちおうは考えられる。この感傷、特に紫上に対する作者の甘さは、少女趣味めいて気味のよいものではない。作者の資質の一つでもあろうか、と『日記』を読んでいると思わぬでもない。

しかし、『源氏物語』は、紫上を失った光源氏の「長恨」でもって終らないという事実注目したい。そして、光源氏死後の世界の主人公が、「世にかずまへられたまはぬ古宮」に育てられた二人の姫君であり、その「古宮」に捨てられた女、つまり浮舟であつて紫上をうけつぐ正統中の正統である「女一宮」ではないという事実は見逃がすべきではないと考える。

私が何を語ろうとしているか、察しのよい向きには、もはやお分りであろう。「古宮」とは、なつかしい響きである。これは、この末摘花の世界の復活である。光源氏の時代において、末摘花を光源氏の世界に「兼濟」するには十分な笑いと読者への弁明が必要であつた。しかし、宇治十帖における「兼濟」は、一点の笑いも弁明も必要はなく、待った無しの切迫感があるのみである。何故か。

私は、源氏物語は巨大な諷諭詩なのだ、と思うのである。諷諭詩の筆法はこうなのである。すでに「新樂府」の序でも紹介したように、作者の主張は最後に明確に語られる。しかし、その「志」に到るまでは、その主張と正反對の事実が徹底して語られる。だからこそ、最後が切れ味鋭くきまるのである。「新樂府」の一年後に成立した、同じく諷諭詩の傑作「秦中吟」は、「新樂府」のような型から一步踏み出て、榮華の裏の貧困、貧困の裏の榮華をたたきつけるばかりで、主張のおしつけがましさが無い分だけ迫力をもつて諷諭の実をあげている。例をあげておく。

歌 舞

秦中歳云暮 大雪滿皇州

雪中退朝者 朱紫尽公侯

貴有風雪興 富無飢寒憂

所宮唯第宅
朱門車馬客
歛酣促密坐
秋官為主人
日中為一樂
豈知閔鄉獄

所務在追遊
紅燭歌舞樓
醉暖脫重裘
廷尉居上頭
夜半不能休
中有凍死囚

輕 肥

意氣驕滿路
借問何為者
朱紱皆大夫
誇赴軍中宴
罇罍溢九醞
果壁洞庭橘
食飽心自若
是歲江南旱

鞍馬光照塵
人稱是內臣
紫綬或將軍
走馬去如雲
水陸羅八珍
膾切天地鱗
酒酣氣益振
衢州人食人

貴族が雪をめで邸宅を作り宴会にうつつをぬかしている頃、牢屋の中の囚人が凍死する。立派な馬で雲のように集

まった貴族達が、「水陸」の「八珍」に飽食している年、江南地方はひでりが続き、衢州では、人が人を食う有様だ。

最後の二句の迫力は抜群であろう。

『源氏物語』に戻る。

楊貴妃の榮耀榮華の陰に上陽人の悲慘があったように、光源氏の榮耀榮華の陰に宇治八宮の悲慘があった。作者は八宮の生涯を、『源氏物語』の須磨巻に接続して語る。光源氏にとって須磨の時は、父帝無き後、弘徽殿太后に追いつめられ、進退窮り西下した屈辱の時であったが、八宮にとつての須磨の時は、彼の生涯でほとんど唯一の光明の時であった。この時、廢太子が画され、光源氏の実子にかわつて、この八宮の立太子が予定されていたのだと作者は語つて、八宮の悲慘を確定する。

光源氏が復活し、彼の時代となつた時、もはや八宮の運命は語られるまでもない。留守を守る実子紫上をかえりみなかったために冷遇された式部卿宮の例に照らして、読者は八宮の悲慘を容易に理解できよう。

光源氏が、六条院という「第宅」を「所宮」し、「車馬の客」を集めて「歌舞」音玉の中で「八珍」に飽食していた長い年月の裏側に、愛妻に先立たれ、家は焼失、愛にも生活にも絶望した八宮の長い生涯があったのである。

宇治十帖の構想は、かかる諷諭詩の手法が息ずいていると思う。光源氏は、幻巻で、「夕殿に螢飛んで」とつづやいた。その「長恨歌」の言葉を作者は「古事」^{コト}と評して記した。⁰⁷⁷

作者も、やはり、白居易と同じく、感傷詩の側に立つ人ではない。

未摘花は、ともかく光源氏によって「兼濟」された。蓬生巻などをみると、辛くもの印象が強いけれども、二条東院にめでたく収容されているのだから、一応「兼濟」と言えよう。空蟬もまた同じ。花散里も秋好中宮も、その環境から考えれば、立派な「兼濟」であろう。明石上は実力と運命でのし上った部分が強いからしておくとしても、紫上とて、考えてみれば、花散里や秋好中宮以上の状況から救出され、手厚く遇された人であってみれば「兼濟」中の「兼濟」といえよう。

が、光源氏が「兼濟」を志し、果せなかった例がある。夕顔の忘れ形見・玉鬘、朱雀院の皇女・女三宮。この二人は、須磨・明石の沈淪から光源氏が復活して以降展開する栄華の時代の二大トピックスであり、この二つの事件ともに、光源氏はその能力を発揮できずに挫折している。

特に女三宮の事件では、致命的な打撃を受け、彼は、その晩年、ガバナビリティを完全に喪失している。夕霧が落葉宮に血迷っている時、忠告しようとして果せず、夕霧に足許を見られているようでは、光源氏も形無しである。「兼濟」中の「兼濟」であると思われる紫上とて、女三宮降嫁以後は、「愛」に限っていても、以前とは異質になっている。彼女の内部において、もはや光源氏が全てではない。

こうみてくると、六条院成立以後の光源氏は、「兼濟」を志してはいるけれども、ことごとく果せぬ人として設定されていることが分ろう。そればかりではない。「兼濟」を志す、その志が、他者を傷つけてゆくというあやにくさを作者は確かに語っている。夫を玉鬘に奪われた鬚黒大将北方の狂乱。女三宮の父・朱雀院の痛憤。女三宮を愛した

柏木の破滅。

六条院は、主宰者光源氏の実力と等分の巨大さを与えられ均衡している。この均衡は絶対で、異分子の侵入に拒絶反応をひき起す生命装置みたに見える。

実際のところ、玉鬘については処置に困っていたのであり、鬚黒の闖入は、考えようによつたら、光源氏の平和を守りこそすれ侵すものではなかったはずである。女三宮にしても、他の女性達と折り合いが付き、女樂の場みたいな平和が永遠に続くとしたら、六条院の榮華は完璧なものとなったであろう。しかし、そうなった時、光源氏と紫上との桐壺以来の「感傷」はふつ飛んでしまうことになる。柏木の行為と女三宮の悲運は、因果応報というより、この「感傷」の犠牲というべきであろう。

「兼濟」に坐折し、過去の秩序を守って生きざるを得ない。楽しみは、詩と酒と琴。そして山水への愛。という生活を決して作者は光源氏に与えてはいない。しかし、そういう生活者を作者は十分に知っていたはずである。

白居易、である。

彼が諷諭詩を作り「兼濟」を訴えつづけたのは、すでに述べたように三十代後半の三年間にすぎない。⁽¹⁰⁾この時、左拾遺の職にあり、これは天子をいさめるのが役目であるから、彼はその役職に忠実であったわけである。しかし、この、酒があっても飲むいとまがなく、山があっても遊ぶことなど思いもかけぬ程の精勵の結果は、⁽¹¹⁾おおいがたい坐折感であり、江州の司馬への左遷という現実であった。

彼の四十代前半は、悲痛の時である。まず母の死による故郷での三年の喪。明けると太子左贊善大夫という閑職。讒言。そして江西省九江で過す屈辱の四年間。

しかし、この期間、酒を飲み山に遊んでいるうちに、白居易自身は、全く変わってしまう。現実を告発し「兼濟」を叫ぶ諷諭詩の熱狂はもはやなく、「公より退きて独処し、或は病を移し閑居し、知足保和、情性を吟翫する」閑適詩の世界へと白居易は転向する。

「人心不過適 適外復何求⁽⁸¹⁾」と彼は宣言した。わがままきままな「適」の境地こそ全てだというのである。「豈独善一身⁽⁸²⁾」と喝破した昔日の面影はない。今は、その「独善」が「兼濟」にかわって彼の思想となった。「与元九書」で「志は兼濟にあり、行は独善にあり」と言っているけれども。彼の現実の選択が「独善」以外なかったのであってみれば、これは苦い告白でしかなからう。

四十歳の時中央に復活した白居易は、この思想とひきかえに、官吏としての生涯を全うした。七十歳で身を引く時彼は形部尚書であった。今の法務大臣といったところか。詩人の生涯としては異例であろう。

この白居易の生涯は、どこか光源氏の人生に似ているように思われる。

玉鬘と女三宮の物語は、白居易の苦い告白「志は兼濟にあり、行は独善にあり」の形象化ではないのか。

光源氏の「兼濟」は、六条院の完成とともに終わっているのであって、六条院の栄耀栄華こそ、光源氏自身の「知足保和」なる「閑適」の世界であったと考えられる。

紫式部は、この閑適の世界を、玉鬘でまずゆすり、女三宮で破壊している。そこに、作者の態度があると思う。紫式部は、白居易の嫌った感傷詩を一応とり入れ、白居易が諷諭詩の次に評価した閑適詩を左程評価していない。彼女の思いは、彼女が人目をしので中宮に講じた「新楽府」つまり諷諭詩にあり、「兼濟」へのあくなき「志」にあったと思う。その思いが宇治十帖を生んだのだと考えたい。

先にも述べたように、この宇治十帖の「兼濟」が決して成就することなく、白居易と同じ挫折で終わっているにしても、作者は「閑適」への逃避を、光源氏の人生を描きおこせることによって密閉し、現実をただたたきつける「秦中吟」の手法でもって、宇治十帖を描き切っているところに、並々ならぬ作者の「志」を私は見る。

六

最後に、言い忘れていたことを一つ思い出したのでふれておく。末摘花の鼻についてである。作者は、これを「普賢菩薩の乗物」だと表現した。普賢菩薩の乗物とは、言うまでもないが「白象」である。この隠喩は強烈で、たちまち末摘花をエレファントマンと化す。末摘花と象のイメージ。意味するものは何なのか。この象の鼻は、「青常」でも「寒気」でも説明できない。

私は、これは「新樂府」の中の一編「馴犀」を遠く響かせて理解すべきなのではないかと思うのである。本文を引用する。

馴犀馴犀通天犀	軀貌駭人角駭雞
海蜜聞有明天子	馭犀乘伝来万里
一朝得謁大明宮	歡呼拜舞自論功
五年馴養始堪獻	六訳語言方得通
上嘉人獸俱来遠	蜜館四方犀入苑

鉢以瑤鑼蹋以金

故鄉迢遞君門深

海鳥不知鐘鼓樂

池魚空結江湖心

馴犀生處南方熱

秋無白露冬無雪

一入上林三四年

又逢今歲苦寒月

飲氷卧霰苦踰躅

角骨凍傷鱗甲縮

馴犀死 蠻兒啼

向闕再三顏色低

秦乞生歸本國去

恐身凍死似馴犀

君不見建中初

馴象生還放林邑

君不見貞元末

馴犀凍死蠻兒泣

所嗟建中異貞元

象生犀死何足言

今、武部利男氏の訳をかかげよう。

かいならされた　さいが　いる　なまえを　ツウテンさいと　よぶ／ずうたい　ひとを　おどろかし　つのはに
わとり　おどろかす／みなみの　くにの　ばんじんが　えらい　てんしの　うわき　きき／くるまに　のって　さい
を　おい　ばんりの　みちを　やってきた／みやこの　ごてんに　まかりでて　てんしに　おめみえ　できた　とき
／よろこび　さけんで　まいおどり　おのれの　てがらを　のべたてる／ごねんの　あいだ　かいならし　きょう
さしあげる　しだいです／ろくど　つうやく　かさねたら　やっと　ことばが　つうじます／てんしは　ひととけ
だものが　はるばる　きたのを　よろこばれ／ばんじんたちには　やど　とらせ　さいは　おにわに　いれさせる／

たべる まぐさは じょうとうで あしの くさは きんぴかだ／けれど ふるさと とおくなり ごもんの う
ちは おくぶかい／うみの とりには わからない かねや たいこの たのしみは／いけの さかなは いたずら
に かわと みずうみ こひしがる／かいならされた この さいの さとは みなみの あつい くに／あきにも
しろい つゆ おりず ふゆにも ゆきは ふりもせぬ／てんしの おにわに いれられて さんねん よねん
すぎさった／さても この とし この つきに ひどい さむさに ぶつかった／こおる みずのみ あられ
ふる なかで うつぶせ みを ちちめ／つや ほねまで こえはて うろこや こうらに しわが よる／か
いならされた さいがしに ばんじんたちは なきじゃくる／てんしの ごもんに にど おじぎ かおいろうれい
に しずんでる／おねがいます いきたまま じぶんの くにに かえりたい／かいならされた さいのようこ
ごえじぬのが おそろしい／きみたち みたまえ ケンチュウじだいの はじめごろ／かいならされた ぞうを は
なち タイの くにまで かえらせた／きみたち みたまえ テイゲンじだいの すえの とし／かいならされた
さいが しに ばんじんたちは なきじゃくる／なげかわしいのは ケンチュウが テイゲンに なると かわる
こと／ぞうが いきのび さいが しぬ いふべきほどの ことじゃない²⁰

この詩のテーマは「感為政之難終也」。善政を全うするのは難しいという諷諭である。建中も貞元も徳宗の時代である。建中の善政と貞宗の悪政、同一人物の政治である。犀や象など問題ではない、一事が万事だといった終り方である。建中の頃、作者は十歳前後。貞元、犀が死んだ十二年は、廿五歳。象の方は話に聞いたものかもしれないが「通天犀」の方は目撃した世界かもしれない。

白居易は「いうべきほどのことじゃない」というが、この「象生犀死」という若い日の見聞こそが、彼をして十数

年後諷諭詩にかりたてる原体験であったのではあるまいか。

さて、末摘花。この詩をかりて言えば、彼女の物語は、「犀が象になった物語」と言えないか。彼女は、この通天犀のごとく、寒さにうちふるえ死んでゆく運命の人であった。その彼女が、光源氏によって救出される。光源氏のお陰で象になれたわけである。

彼女が、青常のようなサイズチ頭ではなく、格好のよい頭の人とされているのは単なる偶然にしても面白い話である。もっとも、サイズチ頭のサイは「小」で「犀」ではない。が、犀はそんなに頭の格好のよい動物ではない。一角二角と突出していて、サイズチ頭そのものである。

末摘花の象のイメージは、彼女の救出のシンボルと考えたい。

「象生」が末摘花としたら、「犀死」は誰の寓喩になるのだろうか。いずれも徳宗時代の話という点を踏まえれば光源氏時代の人物を考えねばなるまい。女三宮か。

徳宗時代という枠をはずせば、末摘花のテーマが正面切って語られる宇治十帖ということになる。もはや「象生」は期待できず、「犀死」あるのみの荒涼たる世界に「兼濟」はない。「独善」すらも成立するのをおぼつかない。作者は、そういう思いをこめて宇治十帖を書いたのではあるまいか。

末摘花を語り、諷諭詩にこだわっているうちに収拾がつかなくなった。このあたりで筆をおくことにする。

- (1) 本文は『今昔物語』『宇治拾遺物語』ともに日本古典文学大系によった。
 本文は新訂増補故実叢書2『江家次第』（明治図書）によった。
- (2) 諸橋『大漢和』所引の『説文解字』によれば、「丁零国」。これはモンゴルの北、バイカル湖畔の国である。『白氏文集』の「城塩州」や「縛戎人」から勘案すれば、皮裘はチベットの風俗であることが分る。
- (3) 『三代実録』仁和元年正月十七日。是日始禁著用貂裘。但参議以上非制限。『延喜式』四十一彈正にも「凡貂裘者、参議已上聴著用之」とある。
- (4) 『江家次第』五春日祭使途中次第。引用の箇所は少し前の本文に、こう述べられている。
- (5) 系図は『本朝皇胤紹運録』（『群書類従』第五輯統群書類従完成会）によった。
- (6) 拙稿「若紫の思念」神戸山手女子短期大学紀要第十九号
- (7) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第二巻。玉上氏は、「物語は絵を伴うものであった。いわば一種の紙芝居であった。絵によって物語の場面も規制される。絵のためには一見必要でない場面も物語の中に含ませねばならないのである」と説明された。物語と絵との先後関係をどう考えるのであろうか。この説明は納得できない。
- (8) 本文は、新潮古典集成『源氏物語』によった。以下同じ。
- (9) 本文は、堤留吉先生所蔵『白氏長慶集』（板本）によった。正字を一部常用漢字に改めた。以下、白氏文集所引詩文は全て同じ。
- (10) 「わかきものはかたちかくれず」を注釈して『細流抄』は次のように言う。「秦中吟を引。古来只此翁の有様を見て頌し給ふとばかり心得侍り。されど是ばかりにては、ふとしたるさま也。風吹きあれておほとなぶらきえにけるを、ともしつくる人もなし云々、かしこへかけてみるべき也。此灯も消えて物おそろしかりし事を思ひ給ふ折しも、此翁などをみて頌し給ふなるべし」
- (12) 『紫式部日記』のこの部分を引用すると、「宮の、御前にて文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をとしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら、教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけ

しき知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ」(新潮日本古典集成『紫式部日記』)である。「宮」は影子中宮、「うち」は一条天皇、「殿」は道長である。

13 「与元九書」で白居易は「謂之諷諭詩、兼濟之志也。謂之閑適詩、独善之義也」と述べ、諷諭||兼濟、閑適||独善の図式を明確にしている。

14 式部利男氏は「白楽天小伝」で、この詩の成立事情を、「夏には日であり、冬には記録的な寒さがあつて」て「餓死する人や凍死する人が出た」元和二年の体験に求めておられる。(『白楽天詩集』六興出版所収)

15 「今僕之詩、人所愛者、悉不過雉律詩与長恨歌已下耳。時之所重、僕之所輕」

16 拙稿「母北の方の熱望―源氏物語の出發」(文芸と批評第3巻3号)は、こういう発想のもとに桐壺巻を論じたものである。

17 螢のいと多う飛びかふも、「夕殿に螢飛んで」と、例の、古事もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

18 「夕霧」巻。特に、花散里と夕霧の会話に着目されたい。

19 「白氏長慶集」巻六の閑適詩「適意」には、白居易のこの頃が簡潔に描写されている。全文をかかざると、「十年為旅客常有飢寒愁 三年作諫官 復多尺素差 有酒不暇飲 有山不得遊 豈無平生志 拘牽不自由 一朝掃渭上 浮如不繫舟 置心世事外 無喜亦無憂 終日一蔬食 終年一布裘 寒來弥懶放 數日一梳頭 朝睡足始起 夜酌醉即休 人心不過適適外復何求」である。

20 「適意」参照。

21 「適意」参照。

22 「新製布裘」

23 「白楽天詩集」六興出版

24 堤先生所蔵本『白氏長慶集』巻三「馴犀」の割注には「貞元丙戌歲南海進馴犀。詔納苑中。至十三年冬、大寒、馴犀死矣」とある。高木正一氏は『旧唐書』德宗紀を引かれ、犀死を十二年とされた(中国詩人選集『白居易』上 岩波書店)。

嵐雪発句注釈 四

福 本 良 二

平 井 亮 一

久保田 智 哉

44 鈴鴨すずがもの声ふり渡る月寒し

○季―冬（月寒し）○鈴鴨―雁鴨科の中形の海鴨。日

本へは十月中頃に渡来する。古来歌にもよく詠まれている。○声ふり渡る―鳴きながら飛んで行くのを鈴の縁でふり渡るといった。

○寒月のもと、鈴鴨が鳴きながら飛んで行く。『続の原』の芭蕉の判詞に「すゞ鴨の声ふり渡る、秀句限なし。一句やすらかにして嚴寒の気色尽たり。彼妹がりの

歌を吟ずれば、六月廿四日の日も寒しと言けん、さま事にや。云々」（『日本俳書大系』による。「さま事にや」は『註解』では「さる事にや」とある）これは『無名抄』に「思ひかね妹がりゆけば冬の夜の河風さむみ千鳥啼く也」（紀貫之『拾遺集』）について、「この歌ばかり、おもかげあるたぐひはなし。『六月の廿六日、寛算が日もこれをだに詠ずればさむくなる』とぞある人は申し侍りし。」とあるによる。寛算は延暦寺の僧で、この日に死し、その怨念でこの日は暑さがきびしいといわれている。（『無名抄』は『校注鴨長明全集』（築瀬氏編）による。）

深川の庵にて イバセを庵にて（其袋（句集））

45 庵の夜もみじかくなりぬすこしづゝ

○季―夏（みじか夜）

○深川の芭蕉庵で過す夜も夏が近づいてすこしずつ短くなっていくのが感じられる。

九月十日 素堂の亭にて

イ(其袋) 「菊花九唱 其二 素堂亭にて人々」十

日のきく見られけるに」

イ(笈日記) 素堂亭

十日菊

蓮池の主翁、又菊をあいす。きのふは龍山イ嵐山(陸奥衛)

の宴をひらき、けふはその酒のあまりをす

ゝめて、狂吟イ独吟(陸奥衛)のたはぶれとなす。なを思(は)

ふ、明年誰かすこやかならん事をあくるとし

いざよひのいづれか今朝に残る菊 ばせを

次ニ路通、越人、友五、嵐雪、其角、素堂

ノ句アリ

(陸奥衛) 初二「貞享五戊辰菊月仲句」トアリ

テ前記ト文章発句同ジ

(風の上) 素堂ノ序中ニアリ

46 かくれ家がやよめ菜なの中に残る菊イ交ル菊(其袋)(句集)

○季―秋(菊)

○九月十日素堂亭の庭の景である。昨日切り残された菊がよめ菜の中に交って見える。『註解』に『此かつしかの鄙にかくれ住めども、素堂が多能のかをりはかくれぬと讚美せしなり。』とあるように、隠逸の士素堂に対する敬意がこめられている。

47 我もらじ新酒しんしゅは人の醒さめやすき

○季―秋(新酒)

○私は新酒を強いておすすめしますまい。新酒は酔がさめやすい。あなたを迎えた喜びに浸っていたいし、これから永くご交誼を願うのに、さめやすい新酒はふさわしくありませんから。

露伴は「芭蕉の越人が雁が音の句の脇句に、酒強ひならふ此頃の月、とあり。嵐雪自ら新酒に比せるは、芭蕉を古酒の極めて好きに比するをいふまでならずとも、おのれ中々越人に強ひるべきほどの佳酒にあらずと、云々」

（評釈芭蕉七部集）といっている。『俳句大観』ではこれを暗黙の中に了解すべきであるとしている。この句の成立の事情からすればこのような意味も出てくる。けれども独立の発句として鑑賞する場合は、そこまで考えるに及ばないと思う。

48 立いで、後あゆみや秋の暮

○季―秋（秋の暮）○後あゆみ―あとしざり。

○草庵を出てみたが、淋しく暮れゆく秋の景色はいずこも同じで、まるで後しざりをしているようである。

『註解』では事実後あゆみをしたようにとっているが、そうではあるまい。前方の景色をながめながら後退してもなかなか景色はかわらないことから後あゆみといったのであろう。『撮解』には「晋山簡云々。時在二童児一歌曰、山公出何許往至高陽池、日夕倒載帰云々。」とある。山簡は竹林の七賢の一人。『晋書』山簡伝には

「日夕倒載して帰る。酩酊知る所無し。」と、山簡が夕暮に酒に酔いつぶれて、車に後向きに乗って帰ると書かれている。倒載はまた空になった酒壺を逆さに車に積むという意にも解されている。だからこの句も酩酊して前向きに歩いたり後向きに歩いたりするともとれる。

『撮解』は上記の文を引用するだけで説明は加えていないが、後あゆみから山簡伝の倒載を連想して嵐雪が山簡を氣どったととっているようで、これは面白い解釈だがいささか無理な氣がする。（「山簡伝」については相愛女子短大教授蔭木英雄氏の御教示による。）

汀水（イ汀水）（句集）

49 鴨おりて水まであゆむ水かな

○季―冬（氷）○汀水―岸のほとりの水。

○鴨が岸のほとりの氷の上に下りて、向うの水のところにまで小走りに行く。

50 古足袋ふるたびの四十に足をふみ込こめ

○季―冬（足袋）

○しじゅうはきなれている足袋も古くなり、私もはや四十台になった。四十と始終が掛詞、古足袋と足とふみ込むが縁語である。なにかのときに自分ももうこんな年になったとふと思うことがある。そういう心の動きをいささか技巧にすぎるがよくとらえていると思う。

51 花に風かろくきてふけ酒の泡あは

○季―春（花）

○「花に風」とはいうが、かろやかな風よ吹け。花びらが舞って酒宴の興を添え、盃の酒の泡を向うへ吹きよせるだろうから。『註解』には「盃へ浪々ななと酒をつげば泡立つもの故、これを向ふへ吹きよせて飲むが大酒する人の常なり。されど花のもとにては、それも遠慮せよと花のあはきと酒の泡とを引きかけたものと見るべ

し。」とある。「それも遠慮せよ」は口で吹くのを遠慮して、自然の風に吹かせるととっておく。

52 樗佩あかしてわざとめかしや芝肴しばさかな

○季―夏（樗佩ぶ）。樗佩て―端午の節句に樗の葉を腰に帯びること。中国伝来の古俗で悪疫を避けるという。ここは樗の葉を魚に添えること。○わざとめかしや―ここではいかにも端午の節句らしいことをしているの意。

○芝肴―江戸芝浦あたりの海でとれた小魚。

○端午の節句に芝魚を売りに来た。桶に入れた魚に樗の葉が添えてある。いかにも節句らしい感じである。

53 イ朝（温故集）（犬註解）
元日や晴てすゞめめのものがたり

○季―春（元日）

○一夜あけてうららかに晴れわたる元日を迎えた。軒

端にさえずるすずめの声もいかにも晴れやかに聞える。
嵐雪らしいあたたかい感じの句である。

(聴) 陸月はじめのめおといさかひを、

人々に笑はれ侍りて

54 よろこぶを見よやはつねの玉はゝ木

○季―春(はつね)○はつね―初子の日。初音は鶯やほととぎすのその年のはじめての鳴声。ここは新年早々の夫婦喧嘩のさわぎをいう。○玉ははき―玉簪たまばしき。上代初子の日に蚕室を掃くのに用いた玉を飾ったほうき。簪の美称。

○正月早々猫のことではうきまで持ち出して夫婦喧嘩をしたが、猫も無事に帰ってきて、妻もよろこんでさわぎは収まった。この妻のよろこびようを見よと、ちょっと照れた感じの句である。『俳諧世説』の「嵐雪が妻猫を愛する説」はこの時の話で、終りにこの句が出ている。

また『元禄宝永珍話』(巻三・「続隨筆大成」別巻五所収)にも同じくこの話と句がある。『註解』には「『初春のはつねのけふの玉簪手にとるからにゆらぐ玉の緒』歌林良材に出たり。云々」とある。この歌は万葉集卷第二十(四四九三)に出ている、家持の作である。

55 うぐひすの宿とこそみれ小摺鉢こすりばち

○季―春(うぐひす)○小摺鉢―小鳥のすり餌をつくる小さなすり鉢。

○縁側に置いてある小さな摺鉢を見た。おやこんな家でうぐいすを飼っているのだと、陋巷にうぐいすを飼う風雅な人の住いを見出した作者の思いがよまれている。また「うぐひすの宿」は野生のうぐいすが寄ってくる家ともとれるが、野生のうぐいすにすり餌を与えるだろうか。

56 見たいもの花もみちよりつぎは繼穗哉

○季—春（繼穗）○繼穗—接木つぎのとき砧木だきにつぐ枝や芽。

○見たいものは、美しいがやがて散っていく花や紅葉ではなく、これから成長していくつぎ穗がついたかどうかである。『撮解』には狂言「花子」の文句があがっているが、「花子」にそのことばはない。『近世俳句俳文集』（岩波・古典文学大系92）頭注や『俳句大観』は、狂言小歌「七つになる子」の「吉野初瀬の花よりも紅葉よりも、恋しき人は見たいものぢや」の文句をふまえたものといっている。『註解』では繼穗を世嗣と解する。これも面白い解釈である。

57 女中方ぢやうほう尼前がたニアマゼは花の先達せんだつ歟

○季—春（花）○女中—ここでは腰元。○尼前—尼御前、尼の敬称。○先達—案内者。

○尼御前はふだんから腰元たちの相談相手だが、花見のときも先達なのか、あのように振舞っているよ。ながく腰元を勤めて、尼になることも多かったので、この尼御前は腰元たちの先輩であろう。

58 桜川はほそくながれて、青柳の里一かまへ、う
ちかすめり
膝へし木サよる長（簡マ）キ／＼ヲサメ女メいやしやいと桜

○季—春（いと桜）○桜川—常陸国の桜川。筑波山の西を流れて霞が浦に入る。蕪村の句に「行年や芥流るゝさくら川」（元文五）がある。○青柳の里—桜川沿いの青柳の里を調べたが、よくわからない。行方郡の巴川沿いの青柳は今もその名が残っている。○膝木—『註解』に「田舎にて糸をとる道具なり。」「『撮解』に「シノ巻の心」とある。糸を紡ぐ道具だが実際にどんなものかまだよく調べていない。○長女—下司の老女のことだ

が、ここでは田舎の老婆のこと。○いと桜―しだれざくら。

○庭に糸桜が咲き乱れ、家では老婆が膝木によって糸を紡いでいる。そのようすは美しい春景色とはそぐわないで、見すばらしい。嵐雪は桜川のあたりへは行ったことがなかったと思われる。これはどこかでこんな情景を見て、謡曲「桜川」を連想し、このような前書をつけて句に仕立てたものと見える。なお「桜川」には「誘へばぞ散る花かづら、かけてのみ詠めしは、なほ青柳の糸桜、霞の間には樺桜、云々」とあって、青柳の里の糸桜とは解釈できない。

イかへたるに(句集)
蚊足が隣かへたりけるに申つかはしける

59 此夕軒端隔ちぬいかのぼり
このゆうべのよこはだ

○季―春(いかのぼり)

○今まで軒をならべて住んでいたが、今晚からは家が

大分離れてしまった。表に出て空き家になった家を見ていると、夕暮れの空には風が浮んでいる。前書は隣に住んでいた蚊足が引越して行ったのでこの句を届けたとの意である。蚊足は丁亥郎と号し、上州館林藩士(「新選俳諧年表」による)その伝は詳らかでないが、多分この人のことであろう。

【追記】

前稿(三)の30「あらおそや」は「遅や」では曲がなさすぎる。「恐や」で恐しい意であろうと雲英末雄氏からご意見が寄せられた。31の「くくだち」は底本通りだが、赤羽学氏は「くくたち」と清音であったかも知れないと指摘された。「広辞苑」等も「くくたち」となっている。39の「沈著世楽」の「沈」は二個所とも「深」であると山本唯一氏の教示があり、「法華経」を見ると確かに「深」であった。また経文では「三界無安 猶如火宅」と続くから「火燄」はこの「火宅」を暗示していると指摘され

た。42の「もちるの木」は正月の餅の意をきかせている
と、米谷巖氏からご意見をいただいた。以上心からお礼
申しあげます。